

第2部 | そこが知りたい！学校を拠点とした公共施設のカタチ



第2部では、高浜小学校等整備事業や高浜市が進める公共施設のあり方などについて、参加者から事前にいただいた質問や意見をコーディネーターが大別し、全国各地のさまざまな事例を知る講師に典型的に先進的な事例を交えてお答えいただき、学校を拠点とした公共施設のカタチに対する理解をさらに深めていきました。

これから新しく高浜小学校を作ろうというときに学校づくりというようなスタンスではなくて、地域施設をつくらうというスタンスに立たないとイメージは変わっていかないかなと思います。

千葉工業大学准教授



倉斗綾子先生

お互いに違う世代が視界にいるという根本的安心感。みんなが集まって、いろんな世代の人がこの社会を作っているんだって感じる環境を作る意味でも学校の複合化というのをもっとやっていきたい。



名古屋国立大学教授
鈴木賢一先生

そこが知りたい！

※参加者からの質問・意見を大別し、それに対し講師からいただいたコメントの抜粋

◎複合化に向けたプロセス

自分もそこにかかわったって意識をいかに持ってもらうかっていうことがポイント。例えば使い方の部分でどう市民が関われるかっていうことを、当事者としてかかわれるようになると、「どうしてくれるんだ」という対立的な意見ではなく「どうしようか」となっていく。

◎複合化に伴うセキュリティ対策

電子的なものに頼っている、とても息苦しいってみんなわかっているはず。要所要所に大人の目がきちっと入っていることで安心が生まれる。セキュリティに関しては、そこで個別に地域の人たちがどういう関わりが持てるかとか、そのコミュニティがどういう性格を持っているかだとか、そういうあたりで自分たちで回答を見つけていかないと難しいと思う。

◎プールの民間活用

自分が通ったプールがかならずしも当たり前なのかどうか、どういうことが本当によいのかということをも1回考えてみるのが大事なんじゃないのかな。あって当たり前、でも実際使っていないのもそれが当たり前とはいきれないところに今きている。

◎避難拠点としての活用

学校が地域に閉ざされている場所だとするといざというときにどんな感じかわからない。自分たちが行っていい場所だという位置づけに学校がなっていくことで避難拠点として機能しやすくなる。

コーディネーター
日本福祉大学教授
吉村輝彦先生



どんなに人口が減ったとしても学校は学校としてあり続ける。大事にしていくことで、地域の拠点になっていくんだと思います。高浜市が今まで、まちづくり協議会とかいろんなところで小学校区単位でやってきたことが、学校とうまく重なり合っていくと避難の話なんかに関してもうまく機能していくと思います。ただし、先に仕組みがあって市民の皆さんどうぞということではよくなくて、やはり市民が自分の小学校区だ、シンボルのひとつとして学校があるんだ、という思いをもってそこにどうかかわっていけるのかということがカギだと思います。